日刊 動労千葉
87. 3. 12
No. 2499
国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二(22)七二〇七

国鉄「分割・民営化」阻止！三里塚二期着工粉砕！

革マル松崎と国鉄当局が一体となったパージ攻撃

東京南局「国労運転士」ゼロに

闘わなければ本当に職場も仲間も守れない

「東京南局管内の電車乗務の運転士をみた場合、各電車区の国労運転士は全員運転職場を追われ国労ゼロに・・・」（三月十日付毎日新聞）　三月十日、国鉄当局は、新会社での配属先の決定において、所属組合による、まさに露骨なまでの不法・不当な差別を全国で強行した。これは、危機にのたうつ革マル・松崎の泣訴をうけた動労千葉・国労絶滅の攻撃だ。全身全霊を怒りで震わせ、革マル松崎打倒、鉄道労連解体・一掃へ起て！

組合所属での差別攻撃

運転職場を中心に組合役員、活動家がパージされ、本来の業務から外され分散異動されている。また「人材活用センター」廃止でも元の職場に戻さず「駅兼務」などという隔離・追放の配転を強行した。

「所属組合によって差別しない」と、国会で政府・国鉄当局自ら答弁してきたこともふみ破った国労・動労千葉破壊だ。

「南局の弁天橋、東神奈川、大船、国府津、伊東の各電車区の国労運転士はゼロ」「田町、蒲田、山手電車区の国労運転士―一六二人中、乗務交番に入れたのは十三人」と東日本＝東京はひどい。

「一企業一組合」粉砕せよ

松崎は、中曽根杉浦の手先となって、鉄労志摩らとつい最近まで「国労では残れない。改革協に入れば雇用が守れる」とハシャいでいた。ところが国労・動労千葉、動労総連合がそっくり新会社にはだれこむ状況となり、松崎は気絶するほどの大打撃をうけてしまったのだ。

反労働者的〝正体〟は満天下に明らかにされる一方で、国労・動労千葉解体に失敗し、自民党・当局・鉄労からも見放され、使い捨てにされるのではないかとビクついている松崎は「人活」二万の労働者が職場に戻ることによって、マル生闘争時の鉄労のように国鉄労働者の怒りの総反撃をうけることを心底から恐怖し「配属で区別」―「余剰」―首切りを絶叫してきたのである。「鉄道労連」東日本委員長に居座った松崎は、戦闘的拠点としてある国労東京・動労千葉をたたきつぶさなければ自分が地獄へたたきおとされることを知っているのだ。

「労使関係のしこりは新会社へ持ちこまれる結果となった」（十日毎日）

新しい会社が絶対にうまくいくはずがない。革マル・松崎が敵の弱点、アキレス腱だ。革マル＝鉄道労連打倒・一掃せよ。

東京日刊新聞（夕刊）3/10

覚悟していたとはいうものの…

運転できないなんて 通勤に6時間なんて

国鉄が新会社配属先決める
当局と国労対立深刻に
電車運転から組合員を排除

国労傳田電車区分会にはり出された組合員の新しい勤務先表。運転士67人のうち残れるのは2人だけだ＝東京都大田区新蒲田で

国労東京地方本部の調べでは、東京南局管内の電車乗務の運転士をみた場合、弁天橋（横浜）三十人、東神奈川（同）七十四人、大船（同）六十四人、国府津（同）一人、伊東（静岡）三十人の各電車区の国労運転士は全員運転職場を追われ国労ゼロに。都内の田町、蒲田、山手電車区は国労運転士計百六十二人中、乗務ローテーションに入れたのはわずか十三人にすぎなかった。（毎日3/10）

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！